Meiji Infocom
informetion and communication

真の「学際」へ。

21世紀のプロジェクト
「情報コミュニケーション学」始動！

明治大学大学院修士課程

情報コミュニケーション研究科
情報コミュニケーション学専攻

Graduate School of Information and Communication

入学試験日程

情報コミュニケーション学部からの学内選考入試	2007年9月30日［日］
Ⅰ期（一般・留学生・社会人）	2007年11月10日［土］・11日［日］
Ⅱ期（一般・留学生・社会人）	2008年2月26日［火］・27日［水］

2007年8月現在 届出手続中 ※名称その他計画に変更が生じることがあります。

既存の学問の枠組みを越え、情報社会における新たな「教養」を創造

Yoshiyuki Nakamura

研究科委員長（予定）　中村 義幸

今なぜ「情報コミュニケーション学」なのか

―情報社会を丸ごととらえる新たな知の枠組み―

20世紀の終わりに、私たちは「情報社会」へと移り住むことを選択しました。その結果として今、情報の形、コミュニケーションの方法はもちろん、ビジネスも日常生活も、さらにはモラルを含むものの考え方までもが一変しつつあります。

このような「情報社会」で生じる新しい問題の数々を、的確に把握し、分析し、解決策を探るためには、その役割を担う学問もまた、自らの姿を大きく変えなければならない…。そのような考えのもと、明治大学が新たな「知の枠組み」として構想し、提案したのが「情報コミュニケーション学」です。

真の「学際」とは ―― 何ができる研究科なのか

―真の「学際」を実現する空間に―

情報コミュニケーション研究科は「学際」を正面から謳います。しかしながら、私たちが考える「学際」とは、一般にいわれるような“学問の垣根を越えた”学際性とは少し異なります。本研究科はそもそも学問に垣根を想定していません。もちろん、「○○学」の名で蓄積されてきた過去の学問的遺産を尊重します。その上でそうした遺産を最大限に活かすような、諸学が境目なく協働し合うような「**学際空間**」（右ページ図参照）を創出したいと考えています。研究者はそこで、自らの専門領域をベースにしつつ、あらゆる知見を知的リソース（資源）として自由に使い、協働の知を組み立てていくのです。

このような「学際」の考え方を実践するのが、私たちが「**プロジェクト**」とよぶ比較的短期の研究プログラムです。これは、ひとつのテーマについて、学内外から各分野の第一線で活躍する研究者を集めての共同研究の形をとります。例えばメディアの問題、環境の問題、生命倫理の問題、時には超心理のような他ではあまり扱われない問題に至るまで、現代におけるありとあらゆる現象を研究対象として捉え、それらを「情報コミュニケーション」という切り口で分析整理し、情報社会のあるべき姿を模索していきます。それぞれの「プロジェクト」は、学際空間のなかで刻々と形を変えながら、その研究対象を補完し、消化していくことになるのです。

どういった人材を育成する研究科なのか

―情報社会を生きるための新しい「教養」を創造―

本研究科が目指すのは、情報社会における一種の「教養教育」といえるかもしれません。「教養」とは、人生において道に迷わないための地図のようなもの。当然、住む社会、時代ごとにことなる教養があるはずです。情報コミュニケーション学の使命のひとつは、こうした地図の情報社会バージョン、すなわち現代の真の「教養」を創り出すこと、私たちはそう考えています。

本研究科で身につけた新しい「教養」は、どのような職業、分野でも力を発揮するもの、いやむしろ、社会のあらゆる場で今後、強く求められるものであることは間違いありません。ここから巣立っていく方たちの活躍が楽しみです。

教育についての考え方と特色

本研究科は新しい「学際」のありかたに基づいて、教育課程を編成しています。その特色は、学際研究への参加、学際的な教育・研究成果の発信、そのために必要な研究技法の修得、という3つの柱です。

特色①
学際研究への参加

「学際」研究は、過去の学問的な蓄積をきちんと踏まえることなしには実践できません。したがって本研究科では、まず学生に、「社会」「人間」「文化」「自然」のいずれかの領域に拠点を置き、自らの核となる知識や研究手法を身につけてもらいます。その上で「社会」「人間」「文化」「自然」の4つの専門領域を底辺に、そして「理論」と「実践」を縦軸に構成されるピラミッド型の「学際空間」の内部で、それぞれが興味と問題関心を抱くテーマについて、他領域の知的資源も活用しながら自由に、そしてアカデミックに研究することができます。

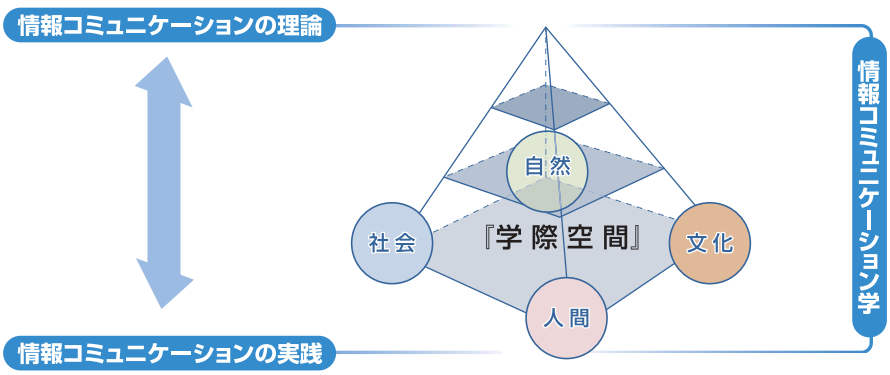
特色②
学際的な教育・研究成果の発信

学際的な教育・研究の成果を広く発信するために、大学以外の諸機関とも連携を図り、開かれたアカデミズムを**学際共同研究プロジェクト**として設置します。学生はこのプロジェクトのいずれかに参加することができ、そこで今日的な課題の解決に学問的に取り組み、研究成果を発信する場を持つことになります。

特色③
学際研究のための技法の修得

以上のような学際研究や活動に必要な研究技法を教授する、「集約型外国文献講読（英語）（ドイツ語）（フランス語）」「フィールド・アプローチ」「アカデミック・ライティング」「専門社会調査」といった研究サポート科目を設置します。

『学際空間』としての専門領域研究（アカデミック・カテゴリー）



専門領域研究と科目一覧

アプローチ・カテゴリー	テーマ・カテゴリー：社会	人間	文化	自然
情報コミュニケーションの理論	社会システム論 行動経済学	現代思想論、人権と法 ジェンダー論	言語システム論	認知情報論、情報と進化
↕	国際関係論、公共政策	法女性学、家族社会学 公共圏・親密圏コミュニケーション	比較文学・比較文化 社会文化史	メディア論、生命論 人類学と意識科学
情報コミュニケーションの実践	金融システム論、情報法 少年法、現代型犯罪と刑法 コーポレート・ガバナンス	応用倫理、 組織コミュニケーション論	表象文化論 異文化間コミュニケーション マルチ・カルチャリズム	科学史・科学哲学、安全学

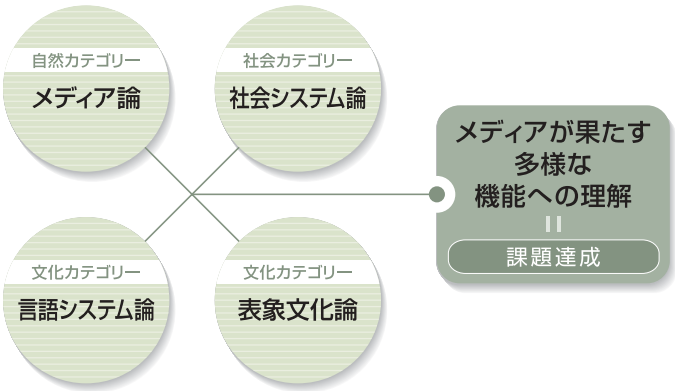
※テーマ・カテゴリーは、各科目を〈社会〉〈人間〉〈文化〉〈自然〉の4つのいずれかに離散的・縦割り的に区分する従来型カテゴリーのように見えますが、実際には連続的・横断的なカテゴリーとして機能します。アプローチ・カテゴリーも同様に、連続的・横断的なものとなります。

真の「学際」研究をシミュレーション ー履修モデル紹介ー

以下では、具体的な課題を設定し、このような課題に対して、本研究科が用意する４つのカテゴリーからどのような科目を選び、どのように多面的なアプローチを行いながら、「学際」研究を実践していくのかシミュレーションしてみましょう。

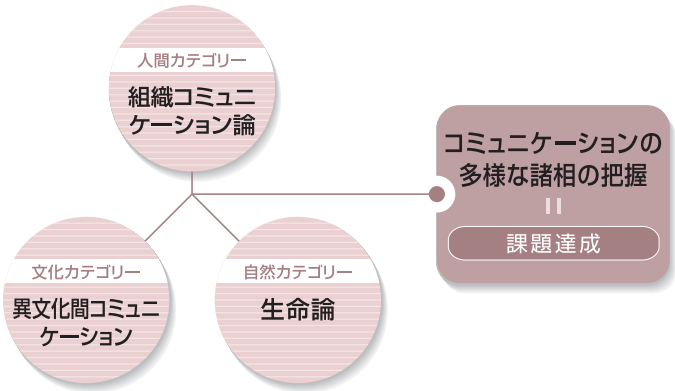
事例① メディアの機能を追究

「メディア」とは本来ラテン語の「medium」（中間にあるもの）が原義です。現在では多くの場合、マスメディアやメディア技術の意味で用いられることが多いようです。ですが「メディア」の本来の意味に立ち戻りながら、この概念を掘り下げていくとき、様々な事が見えてきます。**自然カテゴリー**の「**メディア論**」を中心にしながら、**社会カテゴリー**の「**社会システム論**」で社会とメディアの関係を掘り下げ、また**文化カテゴリー**の「**言語システム論**」では「言語」という格別なメディアの特性を考えることもできるでしょう。同じく**文化カテゴリー**の「**表象文化論**」では芸術とメディアの関係を探ることも可能です。そうした研究から情報社会において「メディア」が果たす多様な機能が浮かび上がってくるのです。



事例② コミュニケーションの諸相

私たちはふつう「コミュニケーション」というと言語を介した意思の疎通をイメージします。ですがコミュニケーションは必ずしも言語を媒介としたものばかりではありません。「コミュニケーション」を学際的な研究対象に据えることでその多様な諸相が浮き彫りになります。**人間カテゴリー**の「**組織コミュニケーション論**」ではコミュニケーションが、組織が目的を達成するにあたっての調整原理として主題化されますし、**文化カテゴリー**の「**異文化間コミュニケーション**」ではコンフリクトの側面が強調されます。そして**自然カテゴリー**の「**生命論**」では、コミュニケーションが人間以外の動物はもとより植物においても重要な役割を果たしていることが明らかになります。学際研究によって事象を多面的・多角的に考察する視座が開けてくるのです。



専任教員メッセージ Message

世の中には「学際性」を謳う多くの学部や大学院があります。ですが、それらは大抵の場合、様々な分野のエキスパートが単に「一堂に会している」に過ぎない、混じり合うことのない“孤立した知の単なる集合”のように僕には思われます。ですが、「学際」は単なる「集合」とは異なります。
僕は「学際性」とは決して組織や場所に付与される形容詞だとは考えません。本当の意味の「学際」とは、例えばルネサンス期の寵児レオナルド・ダ・ヴィンチがそうであったように、あるいはバロック期の天才ライプニッツがそうであったように、個人において実現するものだと思うのです。もちろんレオナルドやライプニッツを気取るつもりはありません。ですが教師と学生がともに既存の枠組みを疑い、脱領域的に視野を拡張すること。問題意識を自己の専門を軸としながら同心円的に広げていくこと。つまり一人ひとりが「学際」的人間に成ること。こうした「学際」的人間の“梁山泊”としてしか「学際」は実現されないと思うのです。

――――「学際」的人間を目指す者、わが研究科に集え！

大黒 岳彦 准教授
Takehiko Daikoku

「学際」研究を実践 ーピックアップ 研究室ー

テーマ・カテゴリー 社会　行動経済学

Norio Tomono
友野 典男 教授

標準的経済学が、合理的で私益追求的というフィクションとしての人間像から出発して理論を構築するのに対して、行動経済学は、完全に合理的ではないが、かといって非合理的でもなく、また自分のことだけでなく他者にも配慮するようなファクトとしての人間像から出発します。現実の人間の経済行動の特徴と原因を探り、それが組織や市場に及ぼす影響、さらにその政策的含意を探っていきます。
経済学のみならず心理学、社会学、生物学、脳科学などの知見を広く援用する学際的な学問領域であり、学生は広い知的好奇心と積極的な探求心が求められます。

テーマ・カテゴリー 人間　人権と法

Yoshiyuki Nakamura
中村 義幸 教授

20世紀前半は、2度にわたる世界規模の大戦争が勃発したために、「戦争の世紀」と特徴付けられますが、その反省に立った後半の国際的な規模での「人権」意識の高まりと、ベルリンの壁崩壊に象徴される東欧諸国の「憲法革命」を動因として、最近では、21世紀は「人権の世紀」とまで言われるほどになっています。
しかし、「ヒューマンライツ」は多義的な概念で、道徳哲学や自然権思想に基づく基礎付けから、実定憲法上の権利に至るまで、多様な議論が存在します。この研究室では、人権と法の関係を、原理論的レベルから法解釈学・政策学的レベルまでトータルな把握を目指しています。

テーマ・カテゴリー 文化　異文化間コミュニケーション

Reiko Nebashi
根橋 玲子 准教授

人々のコミュニケーション活動は、その人々が所属する「文化」によって大きく規定されているといっても過言ではありません。「文化」を共有する人々の間でさえ、問題が生じることがありますが、ましてや異なる文化的背景を持つ者同士の間ではなおさらです。
本研究室では、主に日本社会や日本人に関わる諸問題に焦点を当て、比較的視座から、現代社会におけるコミュニケーション現象に文化的諸要因がどのような影響を与えているのか、個人、集団、組織、国家の各レベルで研究します。

テーマ・カテゴリー 自然　人類学と意識科学

Tatsu Hirukawa
蛭川 立 准教授

脳血流量の計測（放射線医学総合研究所）

人類は数万年にわたって物質と霊魂が共存する神話的な世界を生きてきましたが、一方で、近代科学とともに急速に勃興した、物質だけで世界を記述する世界観は、とくに技術的な応用分野で大きな成功をおさめました。20世紀には、心理学が「霊魂」の領域を「超心理学」という変則的なカテゴリに隔離しつつ「心の科学」を発展させた一方で、現代物理学は観測者の意識から独立した物質という実体概念を放棄せざるを得なくなりました。そもそも、世界を物質や霊魂といった実体の集まりとしてではなく、「情報」というプロセスの集まりとして捉えなおすことができないだろうか ―この、世界観の「情報論的転回」の可能性を模索しています。

情報コミュニケーション学専攻担当教員

テーマ・カテゴリー 社会

専任教員

金子　邦彦 教授　商学博士
担当専門科目 金融システム論
深い専門性と豊かな人間性を兼ね備えた人材へ生まれ変わることを願っています。

塚原　康博 教授　博士（経済学）
担当専門科目 公共政策
担当共通科目 集約型外国文献講読　英語
何事も心構えは重要です。
“tough & positive” で行きましょう。

友野　典男 教授
担当専門科目 行動経済学
大学院は甘い世界ではありません。強い知的好奇心と真摯に学問に打ち込む情熱をもった人を歓迎します。

松浦　寛 教授
担当専門科目 コーポレート・ガバナンス
企業社会の最前線の論理を研究するとともに、感性を磨き自己実現を目指しましょう。

兼任教員

安部　忠宏 外務省特命全権大使
担当専門科目 国際関係論
担当共通科目 集約型外国文献講読　英語

阿部　力也 明治大学情報コミュニケーション学部准教授
担当専門科目 現代型犯罪と刑法

右崎　正博 獨協大学大学院法務研究科教授
担当専門科目 情報法

馬場　靖雄 大東文化大学経済学部教授
担当専門科目 社会システム論

辻脇　葉子 明治大学情報コミュニケーション学部教授
担当専門科目 少年法

テーマ・カテゴリー 人間

専任教員

中村　義幸 教授
担当専門科目 人権と法
「広い視野」を持つことが必要ですが、「小さな仕事」の着実な積み重ねが重要です。

山口　生史 教授　博士（学術）
担当専門科目 組織コミュニケーション論
新しい視点、新しい発想を自らの理論として構築し、分析するための研究力を養いましょう。

施　利平 准教授　博士（人間科学）
担当専門科目 家族社会学
何かにこだわり、探求する過程で体験する辛酸苦楽が、きっと私たちの人生を豊かにしてくれると信じています。

堀口　悦子 准教授
担当専門科目 法女性学
少人数で学ぶ大学院で、学問の醍醐味を体感してください。

宮本　真也 准教授
担当専門科目 現代思想論
担当共通科目 集約型外国文献講読　ドイツ語
「知ること」による自己の変革と、教養の地平を越えた縁遠い他者との共鳴にこそ、知的快感はある。

兼任教員

木村　信子 明治大学文学部兼任講師
担当専門科目 ジェンダー論

田中　智彦 東京医科歯科大学教養部准教授
担当専門科目 応用倫理

藤野　寛 一橋大学大学院言語社会研究科教授
担当専門科目 公共圏・親密圏コミュニケーション

研究サポート演習（共通科目）

兼任教員

佐藤　壮広 明治学院大学社会学部非常勤講師
担当共通科目 フィールド・アプローチ

清水　瑞久 大妻女子大学非常勤講師
担当共通科目 アカデミック・ライティング

永田　夏来 東京外国語大学外国語学部非常勤講師
担当共通科目 専門社会調査

水林　章 上智大学外国語学部教授
担当共通科目 集約型外国文献講読 フランス語

村上　あかね 財団法人家計経済研究所研究員
担当共通科目 専門社会調査

情報コミュニケーション学専攻 Q&A

研究科の特徴的なプログラムは？

本研究科には複数の学際共同研究プロジェクトが常時設置されます。このプロジェクトは、原則的には本研究科の専任教員を核として学際的研究を目指す、研究テーマ本位のフレクシブルな組織体です。このため特定の研究テーマが3年ないし5年の期間を経て一定の成果が得られた後は、新な研究テーマに設定し直すとともに、共同研究プロジェクトに参加する構成員も再編成されることになります。また、このプロジェクトは研究のみならず教育カリキュラムの一環としても機能します。専門領域教育カリキュラムにおいて自らの研究の土台となる専門分野の基礎教育を受けるのと並行して、いずれかの共同研究プロジェクトに参加し、具体的な研究テーマの発見、専門知識の運用、最先端の研究者たちとの人的な交流を図ることができます。

テーマ・カテゴリー

文化

専任教員

權藤　南海子 教授　文学博士

担当専門科目 比較文学・比較文化

自国と他国の精神的土壌を研究し、洞察力・選択能力を磨き、自身の判断基準を確立しましょう!

石川　邦芳 准教授　博士（言語学・学術）

担当専門科目 言語システム論

情報伝達の構造分析という理知と前提・含意等の感性との両面につき海外大学院での最新研究をお伝えします。

須田　努 准教授　博士（文学）

担当専門科目 社会文化史

人と人との関係を歴史的に解明する学問が社会文化史です。柔軟な発想で自立した研究が出来るよう支援します。

根橋　玲子 准教授　博士（コミュニケーション学）

担当専門科目 異文化間コミュニケーション

「文化」と「コミュニケーション」をキーワードに人間の行動をとらえ直してみましょう!

兼任教員

塚本　明子 大妻女子大学比較文化学部教授

担当専門科目 表象文化論

時安　邦治 学習院女子大学国際文化交流学部准教授

担当専門科目 マルチ・カルチャリズム

テーマ・カテゴリー

自然

専任教員

石川　幹人 教授　博士（工学）

担当専門科目 認知情報論

科学研究の実態や成果が見えにくくなっている現代社会の問題に、情報コミュニケーションの視角から切りこむ。

岩渕　輝 准教授　博士（薬学）

担当専門科目 生命論

ぜひ、学問の楽しさ、厳しさ、奥深さにふれてください。

大黒　岳彦 准教授

担当専門科目 メディア論

担当共通科目 アカデミック・ライティング

既存の枠組みに捕らわれない自由で大胆な発想で思考を紡ぎ出してほしい。と同時に、過去の知の遺産に敬意を払うことも忘れないでほしい。

蛭川　立 准教授

担当専門科目 人類学と意識科学

担当共通科目 フィールド・アプローチ

人間は意識を持った物質という不思議な存在です。大学院生時代こそ、その不思議について徹底的に考えましょう。

山崎　浩二 准教授　博士（工学）

担当専門科目 安全学

技術の進歩は便利さと同時に様々な危険ももたらす。そのため、安全に関する知識は今後重要となるであろう。

兼任教員

愼　蒼健 東京理科大学工学部第一部教養准教授

担当専門科目 科学史・科学哲学

廣野　喜幸 東京大学大学院総合文化研究科准教授

担当専門科目 情報と進化

大学院修了後の進路は？

自己の問題意識との関係で、従来の学問体系を踏まえて、さらなる学際性を修得することから,次のような幅広い分野で活躍できる人材を養成します。

①社会制度、経済システムを専門とする教育・研究者。または、NPO、公的機関やシンクタンクで勤務する者など

②相互人格的なコミュニケーションを専門とする教育・研究者、ジャーナリストなど

③言語と文化についての十分な知識を有する、コンサルタント、ジャーナリスト。多国籍企業や官庁において国際的な活動に従事する者など

④身体、認知、メディアを専門分野とする教育・研究者。広い教養を身に付けた、科学ジャーナリスト・サイエンスライターなど

学生支援制度は？

明治大学大学院では、優秀な成績で入学した大学院生を対象に、返還の必要がなく年間授業料の半額相当を標準在学期間給付する給費型奨学金をはじめ、大学院生が研究活動に少しでも専念できるように、各種奨学金制度に力を入れています。

また、在籍しながら従事できる研究者養成型助手制度やRA（Research Assistant、研究補助業務従事者）・TA（Teaching Assistant、教育補助業務従事者）制度があり、これらの制度を通じて一定の報酬を支給し、大学院生を経済的に支援しています（修士・博士前期課程の大学院生はTAのみ）。

そのほか、学会発表助成制度やコピーカード助成など、大学院生の学問への継続の意欲を支えています。

情報コミュニケーション研究科概要

【名　　称】
情報コミュニケーション研究科情報コミュニケーション学専攻

【課　　程】
修士課程

【学位名称】
修士（情報コミュニケーション学）

【定　　員】
入学定員25名　収容定員50名

【修業年限】
2年

【修了要件】
必修単位を含めて32単位以上の修得と学位論文の作成

学費等

		2008年度（1年次）	2009年度（2年次）
学　費	入学金	280,000円	—
	授業料	480,000円	480,000円
	教育充実費	60,000円	60,000円
諸会費	学生健康保険組合費	2,500円	2,500円
合　計（年額）		822,500円	542,500円

※本学学部卒業生および本学前期課程（修士課程・専門職学位課程含む）修了者が、本研究科に入学する場合の入学金は1/2

2008年度入学試験案内

【学内選考入試】
出　願　期　間：2007年8月30日（木）・31日（金）
入 学 試 験 日：2007年9月30日（日）
午前…小論文　　午後…面接試問
合 格 発 表 日：2007年10月3日（水）
入学手続締切日：2007年12月14日（金）

【Ⅰ期（一般・留学生・社会人）】
出　願　期　間：（一般・社会人）2007年10月8日（月）～12日（金）
（留　学　生）2007年10月1日（月）～5日（金）
入 学 試 験 日：2007年11月10日（土）
1時限（10:00～11:30）…英語
2時限（13:00～14:30）…小論文
2007年11月11日（日）……面接試問
合 格 発 表 日：2007年11月14日（水）
入学手続締切日：2007年12月14日（金）

【Ⅱ期（一般・留学生・社会人）】
出　願　期　間：（一般・社会人）2008年1月14日（月）～18日（金）
（留　学　生）2008年1月7日（月）～11日（金）
入 学 試 験 日：2008年2月26日（火）
1時限（10:00～11:30）…英語
2時限（13:00～14:30）…小論文
2008年2月27日（水）　……面接試問
合 格 発 表 日：2008年2月29日（金）
入学手続締切日：2008年3月7日（金）

※詳細は、入学試験要項を確認してください。

アクセスマップ

■JR中央線・総武線、地下鉄丸ノ内線／御茶ノ水駅下車徒歩3分
■地下鉄千代田線／新御茶ノ水駅下車徒歩5分
■地下鉄三田線・新宿線・半蔵門線／神保町駅下車徒歩5分

抜群のアクセスを誇る駿河台キャンパス

情報コミュニケーション研究科の教育・研究活動の拠点となるのが、駿河台キャンパスです。御茶ノ水という立地条件は、研究者を希望する方にはもちろんのこと、働きながらもさらに自分を磨きたい社会人の方にとっても最適な環境となるでしょう。

MEIJI UNIVERSITY

明治大学大学院事務室
〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL.03-3296-4285　http://www.meiji.ac.jp/dai_in/infocom/

※入学試験要項の販売は、大学院事務室まで。
※本研究科の詳細は、ホームページにて公開しています。